

木の上と下の話

小川未明

青空文庫

ある家の門いへもんのところところに、大きなしいの木きがありました。すずめが、その枝えだの中なかに巣すを造つくっていました。さわやかな風かぜが吹ふいて、きらきらと若葉わかばは波なみだてていました。

「お母かあさん、さつきから、小さな子供こどもたちがこの木きの下したでぺちやぺちやいつているが、なにをしているんでしようね。」と、子こすずめがききました。

「さあ、なにをしているのでしよう。年雄としおさんとちい子こちゃんですははね。おまえ下したの枝えだまでいってごらんさい。」と、母ははすずめ

が答こたえました。

「空気銃くうきじゆうで打うたれるといけないな。」

「いいえ、あの子こたちは、そんなわるいことをしませんよ。それに、もうこのごろは、銃じゆうを持つも季節きせつでありませんからね。」

子こすずめは、飛とんで降おりようと思いました。

「だが、あまり下したへいつてはいけませんよ。近きん所じよにねこがいま
すからね。」と、母ははすずめは注ちゆう意いをしました。

「お母かあさん、ねこならだいじょうぶですよ。僕ぼくたちのほうがよつ
ぽど早はやい。」

「いいえ、ここにいる年としとつたねこは、それはりこうで、木きに登のぼ
ることが上じょうず手ずです。いつか、私わたしですら、もうちよつとで捕つかまる

ところでしたから、油断ゆだんをしてはいけません。」

「あの白しろと黒くろのぶちのあるねこでしょう？」

「そうです。あのねこも、このごろどこかわるいのか、それともとしとし年をとって体からだがよわったのか、このあいだ、下したを通とおったときは、元気げんきがなかったようでした。ですから、もう前まえのように恐おそろしいこともないでしょう。」

「前まえつて、いつごろのことですか。」

「去年きよねんあたりまでは、目めがぴかぴかと光ひかつて肩かたを怒いからして、のそり、のそりと歩あるいたものです。」

子こすずめは、このうえお母かあさんのお話はなしをじつとして聞きいている気きにはなれなかったのです。それよりは、下したの子供こどもたちの遊あそびを

見るほうみが、よつぽどおもしろそうでありました。チュン、チュン、と鳴ないて、子こすずめは、下したの枝えだへ移うつっていきましました。

「ちい子こちゃん、このみみずは、あつちの圃はたけへ歩あるいていこうとしたのだね。」と、年雄としおさんが、いつています。ちい子こちゃんは、しろかわく乾かわいた道みちの上うえで、じつとして動うごかないみみずを見みつめていました。

「どうして。」

「だって、太陽たいようが、当あたつて暑あついから、水気みずけのある、圃はたけへいきたかつたのだよ。」

「年雄としおさん、きつとそうだわ。」

ちい子こちゃんは、じつとしている、みみずの体からだに、日ひの光ひかりがに

じむのを見ながら、どうして、こんなところを歩いたのかということがわかりました。

「かわいそうだな。」と、年雄としおさんが、いいました。

「あんまり、のろいからよ。もつと早く歩はやあるけばいいのに。」

「だって、歩あるけないから、しかたがないだろう。」

ふたりふたりの考え方かんがが、ちがいました。

「はや、ありがたかってよ、年雄としおさん。」と、ちい子こちゃんは、どこからか、みみずのじつとして動うごけないのを知しって、集あつまってくるありを見て、不思議ふしぎがりました。

「こいつめ、こいつめ。」といいながら、年雄としおさんは、石いしころで、一いびき、一いびき、小ちいさなありを殺ころしていました。

「年雄としおさん、およしなさいよ。ありが、わるいんではないわ。」

「まだ、みみずは、生いきているんだよ。」

「みみずがのろのろしているから、わるいのよ。」と、ちい子こちやんは、あくまで、みみずのせいにしていました。

木の枝きえだに止とまって、下したのようすを見みていた子こすずめは、

「さあ、どちらが、わるいのだろうか。」と、頭あたまをかしげていました。年雄としおさんにもわからなかつたかもしれませぬ。

「あつちへ、飛とんでいけ。」と、棒切ぼうきれへありのついたみみずを引ひつけて、圃はたけの方ほうへ投なげてしまいました。

「年雄としおさん、お花はなを見みつけて、おままごとしましょうよ。」

二人ふたりは、あちらへ、駆かけていきました。子こすずめは、母ははすずめ

のところへきて、いま見た話をしたのでした。

「お母さん、みみずがわるいのですか、ありがわるいんですか。」
母すずめは、しばらく考えていたが、

「みみずは、ありをたべないから、ありがわるいんでしょうね。」
と、答えました。

子すずめは、お母さんはさすがに偉いと感心しました。

「そうね、お母さん、私たちは、ねこを食べはしないのに、ねこは、私たちを捕ろうとするんですものね。」

「ああ、そうだよ。」

こんな話をしていたとき、あちらの垣根の下をくぐって、白と黒のぶちねこが近づきました。

二

「おや。」と、母ははすずめは、おどろいて、

「あのねこの歩あるきかたをござらんさい。」と、子こすずめに、いいました。

「また、私わたしたちが、ここにいるのを知しつてきたのでしようか。」と、子こすずめも、枝えだの上うえから、そのねこを見み下みろしました。

「おまえには、そんな元げん気きがあるように見みえますか。あのねこは、やつと歩あるいているのですよ。」

木きの上うえで、母ははすずめと子こすずめが、ねこを見みながら、話はなしをして

いると、あちらから、ほかの若いねこがきかかりました。年とつたねこは、とぼとぼといき過ぎようとしたが、若いねこは、そのそばへ寄つてきました。前には、この年とつたねこにいじめられたこともあつたらうが、いまはすべて忘れているようです。「どうしたんですか。」と、若いねこが、ききました、年とつたねこも、ちよつと足をとめて、

「私は、体がわるい^{わたし からだ}のだから、どうかそばへ寄らないでくれ。」と、力なく^{ちから}いいました。

「どこが、わるいのですか。」

「なにか、毒になるものを食べた^{どく た}とみえて、ここまで歩く^{ある}のがやつとなんだよ。」

「そんな気の弱いことではどうするんですか。私たちは、よくあなたに追いかけられたものです。あの時分の元気をだしててください。」

「もう、そんなことをいっておくれでない。私は、これから身をかく、ぼしょさがおも隠す場所を探そうと思っているのだ。」

「あなたがいなくなれば、私は、ここで威張ることができません。たとえ、威張ることができても、私は、うれしいと思いません。」

「おまえさんの天下になるのに、なんでうれしくないことがあるもんかね。」と、年とつたねこが、まぶしそうな目つきをして、

いいました。

「いいえ、このつぎには、私が、またあなたのようになると思う。」

からです。」

若いねこは、なつかしそうに病気のねこへ近づきました。

二ひきのねこは、たがいに顔を寄せ合つて、体をすりつけるようにして、別れたのです。

「さようなら。」

「さようなら。」

木の上では、母すずめと子すずめが、じつとそのようなすを見守つていました。

年とつたねこは、しいの木の下を通るときに、木の上を見上げながら立ち止まりました。二羽のすずめは、自分たちを見たのかと、びつくりしました。

「おや、まだ私たちをねらうのだろうか？」

「逃げましようか、お母さん。」

「いいえ、じつとしておいで。」

ねこの目には、もう獲物の影などうつりませんでした。ただ、その木立がなつかしかつたのです。

「よくこの木にも登ったものだ。あのいちばん高い頂まで、かけ上がるのも平気だった。」

ねこは、さも昔のことを思い出したように、木の周囲をぐるりと、熱のためにふらふらする足つきで、体をすりつけながらまわりました。

「ああ、この木ともお別れだ。」

ねこはしいの木きに別れわかを告げるために、ここまできたのでした。そして、もう思い残おもすことのこがないというふうに、とぼとぼとわき見みもせず、あちらへ消きえてしまいました。

チュン、チュンと、このとき、子こすずめが鳴なき声ごえをたてると、母ははすずめは、しかりました。

「おとなしくしておいで。私わたしたちはみみずにとかつたありのようなまねをしてはいけません。」といたしました。

ある日ひ、急きゆうにこの木きの下したが、やかましかったのです。ちい子こやんの家いえが、引ひつ越こしするのです。

「おや、引ひつ越こしなんだよ。」と、母ははすずめは、びっくりしました。

「えつ、ちい子ちゃんの家が引越すの。」と、子すずめが
 問いかえしました。

「もう、私たちを守ってくれる、やさしい子供がいなくなります
 。」

ちい子ちゃんの兄さんは、空気銃を持ってすずめを打ちにく
 る子供があると、あぶないといつてしかつたのでした。

ちい子ちゃんの兄さんは、しいの木の下に立って、

「しいの木も、すずめさんも、元気でいるんだよ。」と、見上げ
 たのでした。そこへ、妹のちい子ちゃんと隣の年雄さんが、走っ
 てきました。

「年雄さん、僕、しいの実が大きくなつた時分に遊びにこようね

。「と、兄にいさんが、いいました。

「私わたしも、そうしたら、またしいの実みを拾ひろって遊あそびましようね。」
と、ちい子こちゃんがいいました。

「こんどのお家うちに、大おおきな木きがあるの。」と、年雄としおさんが、きき
ました。

「町まちの中なかだから、こんな大おおきな木きはないって、お父とうさんが、いつ
たわ。」

「遠とおいの。」

「電でん車しゃに乗のって、おいだよ。」

子こ供どもらが、いろいろう話はなしをしてるのを、すずめは、木きの上うえで
耳みみを傾かたむけて聞きいていました。

「おまえ、世よの中なかつて、楽たのしいことがあつたり、悲かなしいことがあつたり、ここういうものだよ。」と、母ははすずめは、子こすずめに、静しずかにいつてきかしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

初出：「台湾日日新報 夕刊」

1940（昭和15）年5月7、8日

※表題は底本では、「木《き》の上《うえ》と下《した》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木の上と下の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>